「海―自然と文化」東海大学紀要海洋学部　第６巻第１号　183-193頁（2008）
Journal of The School of Marine Science and Technology, Tokai University, Vol.6, No.1, pp. 183-193, 2008

メルヴィルの『オムー』に見る半文明化されたタヒチとモーレア
― 南海の楽園を侵食する白人キリスト教文明の功罪 ―

五十嵐　博*1

Semi-Civilized Tahiti and Moorea in Melville's *Omoo*
― The Advantages and Disadvantages of White Christian Civilization Encroaching on the Paradise in the South Seas ―

Hiroshi IGARASHI

Abstract

Melville's second book, *Omoo*, whose meaning is a rover in the native language, depicts Tahiti and Moorea toward the mid-19th century, by which time the lands and people there had been half-civilized. He wrote the book based upon his own experiences as a rover on those islands, aiming to be a "speaker of true things" and convey how civilization and missions affected the Polynesians.

He delineates the moral, religious, and social conditions of the half-civilized natives, and expatiates on many a disadvantage and a paucity of advantages the whites' Christian civilization brought to their life. He tells us that the missionary operations and civilizing influence availed them next to nothing, or rather they are rubbing out the natives' culture and driving their existence as a race to extinction.

In this work in conjunction with his first book, *Typee*, we can clearly hear what the ex-whaler had to say about the civilization and religion he was raised in from his international and global viewpoint.

１．はじめに ―― 脱走と放浪

筆者がタヒチ島とモーレア島を10数年前（1993年）に訪れた際に現地で購入したタヒチ紹介本には，文芸の分野でタヒチにゆかりのある人物としてはハーマン・メルヴィル（Herman Melville, 1819～1891）とポール・ゴーギャン（Paul Gauguin, 1848～1903）の２人だけが言及されている．画家ゴーギャンに関しては２ページに渡って説明されているが，メルヴィルについては次のように短く触れているだけである．

「こうした［冒険者や鯨捕り］の中で最も有名なのが脱走者ハーマン・メルヴィルである．彼はマーケサス諸島で１ヶ月余を過ごした後，収監されるべくタヒチに上陸し，その後しばらくモーレアに滞在した」．（The most famous of these [adventurers and whalers] was a deserter, Herman Melville. He spent more than a month in the Marquesas, landed up in prison in Tahiti, and then stayed in Moorea for some time.）[1)]

記録を見てみると，1841年１月３日に当時21歳のメルヴィルが乗り組んだ捕鯨船（*Acushnet*）はマサチューセッツ州フェアヘイヴンを出港した．乗組員名簿には「ハーマン・メルヴィル［出生地：］ニュー・ヨーク［居住地：］フェアヘイヴン［国籍：］米国　年齢：21　身長：176cm　肌の色：色黒　髪：茶色」（Herman Melville [Birthplace:] New York [Residence:] Fairhaven [Citizen of:] U.S. AGE: 21 HEIGHT: 5 feet 9-1/2 inches COMPLEXION: dark HAIR: brown）[2)] と記載されている．

出航してから１年半後，マーケサス諸島のヌクヒヴァに寄港した折にメルヴィルは脱走した．「リチャード・T・グリーンとハーマン・メルヴィルが1842年７月９日にヌクヒヴァで脱走した」（Richard T Green & Herman

2008年１月17日受理
＊1　東海大学海洋学部清水教養教育センター非常勤講師（The General Education Center, Shimizu, The School of Marine Science and Technology, Tokai University）

Melville deserted at Nukehiva July 9th 1842…)[3] という記録が残っている．

脱走後１ヵ月間タイピー（現地語で意味は人肉愛好者）族の谷に滞在し，８月９日に別の捕鯨船（*Lucy Ann*）に乗り組んだが，他の乗組員たちと共に職務放棄による反乱を起こしたため９月26日タヒチ上陸後，現地の収監施設に収容された．しかし，彼はその収容所を抜け出してタヒチとモーレアを放浪した後，11月７日に，また別の捕鯨船（*Charles & Henry*）に乗り組んでタヒチを去り，再び太平洋の航海に出た．

なぜメルヴィルは脱走したのか？その理由は，捕鯨船を脱走した後でタイピー族が住む谷で暮らした経験を素材にして書いた処女作『タイピー――ポリネシアの生活を垣間見て』（*Typee; or, a Peep at Polynesian Life*, 1846）の中で触れられている．メルヴィル自身は「脱走」という言葉を使用せず，「逃げる」（run away）とか「去った」（left），「逃亡した」（escaped），「退いた」（withdrew）という表現をしているが，第一に，彼は「船長の恒常的な暴虐ぶり」（the unmitigated tyranny of the captain ―― *Typee*, Ch. 4, p.56.）[4] に我慢できなくなったからであり，第二に，彼は捕鯨船内での生活に辟易していたからのようである．このことは，まだ捕鯨船内にいて脱走を計画中の『タイピー』の主人公「私」が脱走後の自分の気持ちを次のように想像する場面から推し量ることができる．

「嫌悪さるべき古船を数千フィートの高みから見下ろして，緑に覆われた景色の中で船の狭い甲板や暗い船首楼を思い出してみたらどんなにか楽しいだろう！」（…how delightful it would be to look down upon the detested old vessel from the height of some thousand feet, and contrast the verdant scenery about me with the recollection of her narrow decks and gloomy forecastle!―― *ibid*., Ch. 5, p.69.）

19世紀の捕鯨船の船首楼がどのような有様だったかは，『タイピー』に続いて書かれた『オムー――南海の冒険談』（*Omoo: A Narrative of Adventures in the South Seas*, 1847）の第10章から窺い知ることができる．そこには船首楼の水夫部屋が極めて狭く，「地下牢のように暗くて不潔そのもの」（dungeon-like and dingy in the extreme ―― *Omoo*, Ch. 10, p.38.）[5] で，ゴキブリとネズミの巣窟となっている有様が詳細に描写されている．

『オムー』の物語が始まってすぐに，貿易船から脱走して南海の島に軍神として10年間住みついている白人が登場するが，メルヴィルは，顔に青い帯と鮫の姿の刺青を施しているこの白人を「キリスト教世界と人間社会を否定した背教者」（a renegado from Christendom and humanity ―― *ibid*., Ch. 7, p.27.）と呼んでいる．メルヴィルはこの「背教者」にはなれなかった．『タイピー』で「私」は，現地人から刺青を施すことを何度も勧められたが，絶対に受け入れなかった．「私」は捕鯨船から「逃亡した」が，未開の習慣からも逃げ出したと言えよう．

マーケサス諸島の未開の島から逃げ出して，別の捕鯨船に乗ったところから『オムー』の物語が進行するが，メルヴィルは，この第2作の執筆途中でロンドンの出版者ジョン・マレー（John Murray）に宛てた手紙（1846年７月15日付）の中で，次のように作品の皮相部分を紹介している．

「この作品は（『タイピー』とは全く異質な）南海での冒険の数々を扱っており，英国植民地の捕鯨船（シドニー船籍）での波乱に富んだ航海とタヒチ島でのコミカルな滞在が書かれています．期間は約４ヶ月ですが，この短い間，私も私の物語も共に動き続けます」．（It embraces adventures in the South seas (of a totally different character from “Typee”) and includes an eventful cruise in an English Colonial Whaleman (A Sydney Ship) and a comical residence on the island of Tahiti. The time is about four months, but I & my narrative are both on the move during that short period.）[6]

そして，この数ヵ月後の原稿完成後に同じジョン・マレーに宛てた手紙（1847年１月29日付）では，作品のテーマに触れている．

「『タイピー』の続編としてちょうどよいと判断していただけるものと思われます．というのも，『タイピー』が原初のままのポリネシアの生活を描いていたのに対して，新作は白人たちとの交流の影響を受けているポリネシアの生活を描写しているからです．また，この作品には，今日太平洋を放浪する船乗りたちの“遊び人”的な生き方が書かれていますが，こうしたことは今までどこにも書かれたことはないと思われます」．（…I think you will find it a fitting successor to “Typee”; inasmuch as the latter book delineates Polynesian Life in its primitive state ―― while the new work, represents it, as affected by intercourse with the whites. It also describes the “man about town” sort of life, led, at the present day, by roving sailors in the Pacific ―― a kind of thing, which I have never seen described anywhere.）[7]

Omoo とはマーケサス諸島の方言で「島から島へと渡り歩く放浪者」（a rover, or rather, a person wandering from one island to another ―― *Omoo*, Preface, p. xiv.）の意味で，当然，マーケサス諸島からタヒチ，モーレア[8] と放浪する「私」を指している．

『タイピー』は，キリスト教と白人文明とに侵食され征服される前のポリネシアを語っており，「野蛮人」(savage）という語が頻出する．これに対して『オムー』は，既にキリスト教と白人文明とに半ば征服されたポリネシアを語っており，「半野蛮人」(semi-savages ―― *ibid*., Ch. 67, p.254.）と「半文明」(semi-civilization―― *ibid*., Ch. 73, p.279.）の地を舞台としている．

では，その「半文明」の地，19世紀前半のタヒチとモーレアからメルヴィルは何を読者に向けて語っているかを，以下に見ていく．

2．作品の目的――「真実の語り手」として

『モービィ・ディック――鯨』(*Moby-Dick; or*, *The Whale*, 1851）の物語の最初のほうで一度だけ登場するマプル神父は，鯨の腹の中から吐き出されて「真実の語り手」(speaker of true things ―― *Moby-Dick*, Ch. 9, p.67.)[9] になったヨナの寓話を引き合いに出しながら「虚偽の面(おもて)に向かって真理を説くこと」(“To preach the Truth to the face of Falsehood!”―― *ibid*., Ch. 9, p.68.）の意義を聴衆に語りかける．

メルヴィルは実は，処女作『タイピー』を書いていた当初から，この「真実の語り手」であった．『タイピー』の「序文」(Preface）では，ポリネシア地域で活動する一部宣教師の悪行，およびその地域に対する欧米の関心の大きさに言及した後で，「粉飾なき真実を話すという著者の切なる願い」(his［the author's］anxious desire to speak the unvarnished truth ―― *Typee*, Preface, p.10.）を表明している．

『オムー』の「序文」(Preface）には，この作品の２つの目的が書かれている．第１の目的は「未開の，あるいは半ば文明化されたポリネシアの島々」(the barbarous or semi-civilized islands of Polynesia ―― *Omoo*, Preface, p. xiii.）に寄港しながら捕鯨業に携わっている船乗りたちの「放縦な精神」(a spirit of the utmost license ―― *ibid*.）と生き方の一端を伝えることである．そして，第２の目的は「外国人との無差別な交流，および宣教師たちによる布教の影響でキリスト教に改宗させられたポリネシアの人々が置かれている現状を詳らかにする」(to give a *familiar* account of the present condition of the converted Polynesians, as affected by their promiscuous intercourse with foreigners, and the teachings of the missionaries, combined.―― *ibid*.）ことである．

メルヴィルは，記述内容は「放浪する船乗り」(a roving sailor―― *ibid*., p. xiv.）として現地で得た「現地人の社会状況に対する正確な観察」(correct observations on the social condition of the natives ―― *ibid*.）に基づいており，「布教活動関連の記述はすべて，良心と厳正な事実に基づいている」(In every statement connected with missionary operations, a strict adherence to facts has, of course, been scrupulously observed.―― *ibid*.）と述べた後，「真実と善を真摯に求める気持ちから著者はこのテーマに触れた」(Nothing but an earnest desire for truth and good has led him to touch upon this subject at all. ―― *ibid*.）が，「指摘された数々の悪の是正の仕方」(the best mode of remedying the evils which are pointed out ―― *ibid*.）については他の人々に委ねる，と結んでいる．つまり彼は，自分の役割は「真実の語り手」たることだと言明しているのである．

メルヴィルは，白人文明に侵される前のマーケサス諸島の島を舞台とする『タイピー』の中では，直截な言葉で白人キリスト教文明を糾弾し，その罪とマイナス面を語った．したがって『タイピー』出版当時，複数の定期刊行誌でこの点が指摘され，例えば「この本は宣教師と文明に対する中傷と悪口に満ちている」(The book abounds in… slurs and flings against missionaries and civilization. ―― *The New - York Evangelist*, April 9, 1846)[10] とか「時として彼は文明とアングロサクソン民族に対する忠誠心を失う」(He…at times almost loses his loyalty to civilization and the Anglo-Saxon race.―― *Graham's Magazine*, May, 1846)[11] あるいは「文明および特に宣教活動に対する著者の破廉恥極まりない侮辱」(his flagrant outrages against civilization, and particularly the missionary work ―― *The Christian Parlor Magazine*, July, 1846)[12]，「植民地化システム全体が攻撃されている」(the whole system of colonization is attacked ―― *The New Quarterly Review*, October, 1846)[13] などと評された．

『オムー』の出版当時も「著者の虚言癖は，宗教と宣教師に対する彼の悪意と同様，火を見るように明らかだ」(The author's mendacity is sometimes flagrantly visible, as well as his spite against the religion and its missionaries.―― *The New-York Evangelist*, May 27, 1847)[14] などと攻撃されたが，しかし『オムー』でのメルヴィルは，白人キリスト教文明の罪悪と共に，わずかながらもその功績にも言及している．同時に，現地人に関しても『タイピー』では未開の蛮人の美点のみを語り，白人と比較しながら誉めるだけだったが，『オムー』では半文明化された現地人の怠惰や盗みの行為といった欠点を際立たせてもいる．

彼は19世紀前半のニューヨークおよびニューイングランドのキリスト教精神風土の中で育った人間であり，作品の中の「私」メルヴィルは，タヒチの収容所に収監されている間も毎日曜，現地の教会に出席する．モーレア島到着後も，日曜朝には現地に住む白人に案内を頼んで，遠く離れた所にある教会へわざわざ出かけて行くし，その後，モーレア島内の別の集落へ移動しても毎日曜には必ず教会に行く，いわば，歴としたクリスチャンである．

しかし，同時に彼は，ニューイングランドと米国のキリ

スト教精神風土の枠を超えて，世界各国の人間たち，さまざまな人種と寝起きを共にした国際人だった．捕鯨船にはあらゆる国からの人間，民族，人種が乗っている．[15]『オムー』に登場する捕鯨船の場合には，英国人，米国人，マオリ族の銛手，黒人のコック，ポルトガル人，デンマーク人などが乗り組んでいる．19世紀の陸上の人間世界は強烈な人種差別制度と偏見に支配されていたが，捕鯨船の船乗りであったメルヴィルは，いわば世界人，地球人であった．だからメルヴィルは『オムー』の最終章で，「国ということに関しては，船乗りは特にどの国民にも属していない」（As for our country, sailors belong to no nation in particular.—— *Omoo*, Ch. 82, p.313.）と主張するのである．

では，地球人としての視点をもつ元捕鯨船乗組員メルヴィルが，「真実の語り手」として私たちに伝えている内容を以下に整理する．

3．布教と白人文明の功罪

『オムー』は，「序文」（Preface）と「序章」（Introduction）に続いて82章に分割された物語が，舞台を捕鯨船ジュリア号（Julia）からタヒチ島，モーレア島へと変えながら展開される．序章では「私」がマーケサス諸島ヌクヒヴァ島のタイピー族の谷から脱出してジュリア号に乗り込むまでの経緯が短く語られ，１～27章は出帆したジュリア号を舞台に船乗りたちの船内での生活と彼らの職務拒否による反乱が詳細に物語られ，28～29章では，反乱を起こした船乗りたちがパペーテ港に停泊しているフランス戦艦内に一時収容される．30～51章はタヒチを舞台として現地収容所での生活が描かれ，52～82章では舞台はモーレアに移り，島を放浪した後，「私」は日本へ向かう捕鯨船リヴァイアサン号（Leviathan）に乗り組んでモーレアを去る．

全82章の中のどこに，読者は「真実の語り手」としてのメルヴィルの言葉を読み取ることができるのだろうか？

1846年12月10日にメルヴィルは，『タイピー』出版を契機に親交を結ぶことになった *Literary World* 誌の編集者エヴァート・ダイキンク（Evert A. Duyckinck）に宛てて完成直前の『オムー』原稿を送り，添え状にこう書いた．

> 「以下の章に特に注目してください——33，34および45，46，47，48，49，50章です．これらの章は布教および現地人の状況に関するものです」．（I beg you to pay particular attention to the following chapters —— Chapters 33，34 — & 45，46，47，48，49，50．—— They all refer more or less to the missions & the condition of the natives.）[16]

二重下線はメルヴィル自身が付したものであり，添え状で言及された章は完成されて出版された作品の32，33および44，45，46，47，48，49章に該当する．

これら８つの章にはタヒチの道徳・宗教・社会状況が描かれており，この中でメルヴィルは布教と白人文明に関する真実を直截な言葉で語っている．

3.1　注目の８つの章

８つの章の中でメルヴィルが語る内容は，主として，キリスト教布教と白人文明が未開の地にもたらしたマイナスと罪悪の具体例である．以下に各章ごとの内容を整理する．

- 32章「タヒチにおけるフランス人の行動」（*Proceedings of the French at Tahiti*）:
  タヒチがフランスの保護領とされるまでの経緯を語り，フランスに対する現地人の抵抗と暴動は「彼らの種族の絶滅を加速させるだろう」（must accelerate the final extinction of their race —— *Omoo*, Ch. 32, p. 125.）とメルヴィルは述べている．
- 33章「牢屋ホテル内の我々を人々が見に来る」（*We Receive Calls at the Hotel de Calabooza*）:
  白人たちがやって来るようになってからタヒチの現地人の間には病気と奇形が多々発生していること，および彼らの身体的退化に触れている．
- 44章「パポアの大聖堂・ココヤシの教会」（*A Cathedral of Papoar・The Church of the Cocoa-Nuts*）:
  タヒチの現地人教会の有様，がやがやとうるさくて無秩序状態の現地人会衆を描いている．
- 45章「宣教師の説教，および考察」（*A Missionary's Sermon; with Some Reflections*）:
  教会内で，聖歌合唱，祈祷，タヒチ版聖書の朗読に続いて行われる英国人プロテスタント宣教師による説教の中身を記述している．説教の中身は，①フランスは悪い．フランスのカトリック宣教師たちも悪い．悪いフランス人を英国艦隊が駆逐するだろう．②捕鯨船員らは悪い．娘たちは船員らを追いかけるな．③英国は偉大で，文明がもたらす豊かな生活を享受している．④英国人宣教師は現地人のためにたくさんのことをしている．だから食べ物をたくさん明日持って来てくれ，というものである．

  この描写に続いてメルヴィルは「おそらく南海の人々ほど，生来的にキリスト教の戒めに向いていない民族はこの地上にいないだろう」（…there is, perhaps, no race upon earth, less disposed, by nature, to the monitions of Christianity, than the people of the South Sea.—— *ibid*., Ch. 45, p.174.）と述べ，タヒチ人の特性について次のように考察している．

「彼らの柔らかな物腰，一見したところ非常に純真で従順な感じが，誤解をもたらしたのだが，こうした感じは，肉体的そして精神的怠惰の副産物にすぎなかったのである．体つきの艶かしさ，そしてどんなにわずかな抑制も嫌う性向は，熱帯の豊かな自然にはどれほどふさわしいものであろうとも，キリスト教の厳格な道徳にとっては最大の障害である」．(An air of softness in their manners, great apparent ingenuousness and docility, at first misled; but these were the mere accompaniments of an indolence, bodily and mental; a constitutional voluptuousness; and an aversion to the least restraint; which, however fitted for the luxurious state of nature, in the tropics, are the greatest possible hindrances to the strict moralities of Christianity.―― *ibid*., Ch. 45, p.175.)

さらに，「ポリネシア人に固有の性質」(a quality inherent in Polynesians ―― *ibid*.) として，彼らが相手を喜ばせるために感情を装い，ふりをする傾向があることに触れ，その社会的・宗教的事例に言及しながら，この性質は「何にもまして偽善に近い」(more akin to hypocrisy than any thing else ―― *ibid*.) もので，誤解を招くものであるとメルヴィルは言う．

● 46章「宗教警察に関して」(*Something about the Kannakippers*):

現地の娘が自分は口と目と手の部分だけクリスチャンだと話す場面を描写し，それに続けて「ポリネシアのキリスト教改宗者全体に見られる宗教的偽善」(hypocrisy in matters of religion, so apparent in all Polynesian converts ―― *ibid*. pp.178-9.) のタヒチにおける実態を伝えている．タヒチでは，現地人による宗教警察が島民たちに教会へ行くことを強制し，鞭や罰によって彼らにキリスト教に従うことを強制していると．

● 47章「タヒチの服装」(*How They Dress in Tahiti*):

服装をはじめとするタヒチの民族文化の目に見える部分が否定され抹殺されてしまっている状況を伝えている．

まず，娘たちが伝統的なタパ布作りをしなくなり，怠惰にのんびり過ごしていることをメルヴィルは語る．そして，女性たちが腰から下を白い綿布でゆるく覆い，前の開いたガウンのようなものを身にまとっている様子，男たちにはヨーロッパの服装への憧れがあり，上下揃っている必要はなく，ばらばらでも，単一でも，冬物でも，小さすぎても，とにかくヨーロッパの服装品を身につけることがよいと考えられている有様を描いた後で，メルヴィルはこう言う．

「しかし，外国の衣服を身につけている彼らの多くは馬鹿みたいに見えるが，本来の民族衣装を身につけていた時のタヒチ人は全く異なる外見を呈していた．それは極めて優美で品があり，お堅い人以外の人たちにとっては控えめなもので，それに特に気候，風土に適していた」．(But ridiculous as many of them now appear, in foreign habiliments, the Tahitians presented a far different appearance in the original national costume; which was graceful in the extreme, modest to all but the prudish, and peculiarly adapted to the climate.―― *ibid*., Ch. 47, p.182.)

タヒチの伝統衣装が，女性がつける花の首飾りや花冠までもが「忘れられし未開の風習」(a forgotten heathen observance ―― *ibid*.) として，法律によって禁止されている．さらには，伝統的スポーツや娯楽――踊り，球蹴り，凧揚げ，笛吹き，昔からの歌――およびパンの実の収穫祭も，刺青と同様に法律によって禁止されている事態を伝えるメルヴィルは，

「当然，宣教師たちは心から良かれと思って，こうした，いわばタヒチ人の国民性を奪う行為を行ったのだろうが，結果は嘆かわしいものだ」(Doubtless, in thus denationalizing the Tahitians, as it were, the missionaries were prompted by a sincere desire for good; but the effect has been lamentable.―― *ibid*., Ch. 47, p.183.)

と結んでいる．

● 48章「タヒチの現状」(*Tahiti As It Is*):

メルヴィルは，さらに深く突っ込んだ考察を展開する．

「しかしまず最初にはっきりと理解しておいていただきたいことは，この問題について私が，ここで，そして他の所で，話さなければならないことすべてにおいて，宣教師たちや彼らの大義を傷つける意図は全くないということである．私はただ実態を伝えたいだけである」(But in the first place, let it be distinctly understood, that in all I have to say upon this subject, both here and elsewhere, I mean no harm to the missionaries nor their cause; I merely desire to set forth things as they actually exist.―― *ibid*., Ch. 48, p.184.)

と前置きした後で，

「宣教師たちによる文明化とキリスト教化の試みを含めて，外国人とポリネシア人との交流がもたらした結果の最も分かりやすい実例が，多くの点でタヒチである．タヒチ人をキリスト教徒化し，外国の慣習を導

入することによって彼らの社会状況を改善しようとする実験はし尽くされた」(Of the results which have flowed from the intercourse of foreigners with the Polynesians, including the attempts to civilize and christianize them by the missionaries, Tahiti, on many accounts, is obviously the fairest practical example... the experiment of christianizing the Tahitians, and improving their social condition by the introduction of foreign customs, has been fully tried.—— *ibid*.)

と述べ，続いて，タヒチ伝道が開始されてから60年近くを経た今の，つまり19世紀前半のタヒチにおいて見られる変化を具体的に列挙している．

各国の白人たちとの長い交流の結果としては，偶像崇拝が完全に廃止されたことと，白人とタヒチ人の友好関係がもたらされて，すべての船が安全に入港できるようになったこと，また宣教師たちによる貢献としては，現地人のモラルが向上し，聖書が現地語に完全翻訳され，教会と学校が設立されたことを挙げている．

タヒチの道徳的・宗教的状況に見られる布教および白人との交流の結果についてメルヴィルは，彼と同時代の19世紀前半の航海者や牧師ら３人の著作からの引用を証言として提示している．それらの証言は，宣教師は善と共に多大の悪をタヒチ人にもたらした，ヨーロッパ人との交流がタヒチ人の状態を悪化させた，キリスト教は根付かない，という趣旨のものである．

メルヴィルは，さらに実態を暴く．モーレア島では宣教師夫妻によって初等教育での人種隔離が行われている．そこでは，

「２つの人種ができる限り交わらないように遠ざけられている．その理由は，白人の子供たちを道徳的汚染から守るためだと公言されている．さらに，その目的を確保するために，白人の子供たちが現地人の言語を習得するのを阻止するためのあらゆる努力が行われている」．(…the two races are kept as far as possible from associating; the avowed reason being, to preserve the young whites from moral contamination. The better to insure this end, every effort is made to prevent them from acquiring the native language.—— *ibid*., Ch. 48, p.188.)

サンドイッチ諸島（現ハワイ諸島）ではもっと酷くて，

「数年前に，宣教師たちの子供らのための遊び場が高いフェンスで囲まれた．悪いハワイ人の子供たちを効果的に排除するために」．(…a few years ago, a play-ground for the children of the missionaries was inclosed with a fence many feet high, the more effectually to exclude the wicked little Hawaiians.—— *ibid*.)

現地人の不道徳行為が増加しているのは事実であるが，しかし，本来品性の高かったポリネシア人を堕落させたのはキリスト教布教行動と白人文明である，とメルヴィルは結論を下している．

● 49章「タヒチの現状 —— 続き」(*Same Subject Continued*):

白人文明に侵食され征服されつつあるタヒチの現状と共に未来予測をメルヴィルは次のように語っている．

タヒチ人はもともと体質的に怠惰だが，キリスト教徒化されても勤勉になるどころか，逆にもっと怠惰になった．「ヨーロッパ製品のほうが明らかに優れているため」(since the superiority of European wares has been made so evident —— *ibid*., Ch. 49, p.189.)，伝統的な「タパ布作りはすたれ」(manufacture of tappa is nearly obsolete —— *ibid*.)，昔からの道具もほとんど作られなくなった．「タヒチ人には何もすることがなく」(In Tahiti, the people have nothing to do —— *ibid*., Ch. 49, p.190.)，「目的のない，無気力な生き方」(their aimless, nerveless mode of spending life —— *ibid*.) をしている．

「南海の島々での文明の証は，白人が直接関っているものだけにある」(every evidence of civilization among the South Sea Islands, directly pertains to foreigners —— *ibid*.)．白人文明が移植されただけで，現地人はそれに関っていない．「彼らの種族は，自然界の気候に合わせた自然な状態で生き長らえるしかない」．(Calculated for a state of nature, in a climate providentially adapted to it,… as a race, they can not otherwise long exist.—— *ibid*.)

白人が持ち込んだ天然痘などの伝染病が原因で，タヒチの人口は数10年間で20万から９千に激減した．彼らは以前と比べてずっと不幸になった．「宣教師によりもたらされた恩恵も，他の手段でもたらされた巨大規模の悪と比べたら全く無意味になる」．(…the benefits conferred by the latter［=missionaries］become utterly insignificant, when confronted with the vast preponderance of evil brought about by other means.—— *ibid*., Ch. 49, p.192.)

「彼らの未来に希望はない…ヨーロッパ人と接触した他の非文明人と同様，彼らは現在の状態で静止したまま，やがては絶滅するだろう」．(Their prospects are hopeless… like other uncivilized beings, brought into contact with Europeans, they must here remain stationary until utterly extinct.—— *ibid*.)

以上，メルヴィルが特に読者の注目を求めている８つの章の骨子を整理したが，彼が「真実の語り手」として読者に伝えたいことは，キリスト教の布教とヨーロッパ白人文明が未開人のカルチャーと精神風土を否定し消滅させると同時に彼らの生身の存在自体を絶滅に導いているという白人キリスト教文明批判であると要約できよう．

3.2　罪と功績

白人文明総体としての罪を語ると同時にメルヴィルは，個々の白人たちによる罪の事例にも触れている．

まず，ジュリア号の船長が現地人との話し合いの途中で急に拳銃を撃った場面を描写した後で，メルヴィルはその行為を次のように非難している．

「こうした無茶苦茶な残虐行為は，あまりよく知られていない島々に上陸する船長らの側からは珍しいことではない．タヒチから帆船でわずか一日の所にあるポモツ諸島においてさえも岸辺にやって来る島民たちが狭い海峡を通る貿易船から撃たれたことが数回あったが，これだって，ならず者らの単なる遊びで撃たれたのだ．

実際，多くの船乗りたちのこれら裸の未開人に対する見方は信じがたいほどだ．連中は彼らを人間とは思っていない」．

(Wanton acts of cruelty like this are not unusual on the part of sea captains landing at islands comparatively unknown. Even at the Pomotu group, but a day's sail from Tahiti, the islanders coming down to the shore have several times been fired at by trading schooners passing through their narrow channels; and this too as a mere amusement on the part of the ruffians.

Indeed, it is almost incredible, the light in which many sailors regard these naked heathens. They hardly consider them human.―― *Omoo*, Ch. 6, p.25.)

また，ナンタケットからの捕鯨船の船長が，現地人との間に問題を起こし，仕返しために大量の蚊をモーレア島に放った行為をメルヴィルは怒り，その船長の名を調べ出して告発している．

さらには，タヒチ駐在フランス領事が真珠貝の取引を独占し，「一日釘６本もしくはそれ以下の報酬で雇われた現地人が真珠貝を採りに潜り」(for half-a-dozen nails a-day, or a compensation still less, the natives are hired to dive after them.―― *ibid*., Ch. 17, p.63.)，採られた貝をフランス本国に送って莫大な利益を上げる搾取体制を読者に伝えている．

しかし同時に，メルヴィルは白人による功績にも触れている．白人文明による侵食をほとんど受けていない地を舞台とする『タイピー』では，白人文明のマイナス面と犯した罪のみを語っていたが，半文明化された地が舞台の『オムー』では，多くのマイナス面と同時に，わずか2つの事例とはいえ，プラスの側面にも言及している．

まず第一に，タヒチ島の海沿いに走る広い道路である．元々は布教活動で移動する宣教師たちのためにつくられたものであるが，「文明がタヒチ島でした最善の行為」(by far the best thing which civilization has done for the island ―― *ibid*., Ch. 30. p.114.) だとメルヴィルは言う．

次に，ヨーロッパの航海者たちがもたらした果実，野菜，動物である．オレンジ，イチジク，パイナップル，レモン，ライムなどの果実および野菜，さらには牛，羊，山羊がヨーロッパからの航海者たちによって18世紀後半にタヒチを中心とするソシエテ諸島に持ち込まれた事実を記述するメルヴィルは，

「島民たちのためになされたこれらのことを見てみれば，クックやバンクーバーはある意味，かれらの大恩人とも考えられよう」(…after all that of late years has been done for these islanders, Cook and Vancouver may, in one sense at least, be considered their greatest benefactors.―― *ibid*., Ch. 31. p.121.)

と述べている．

4．半文明化された現地人の負の側面と変わらぬ善性

『タイピー』では，白人文明に侵される前のマーケサス諸島現地人を否定的に語ることはなかったメルヴィルだが，『オムー』では，文明に半ば侵食されたタヒチやモーレアの現地人の負の側面を身体的側面，心情的側面，精神的側面および道徳的側面から取り上げている．

まず身体的側面である．『タイピー』では「滞在していた間に私は病人を1人しか目にしなかったし，彼らの滑らかな肌には病気のしるしや痕跡は見られなかった」(During the whole period of my stay I saw but one invalid among them; and on their smooth skins you observed no blemish or mark of disease.―― *Typee*, Ch. 17, p.183.) と言っていたが，すでに半ば文明化されたタヒチでは，白人たちが来るようになってから発生した病気が原因で背中が醜い奇形になった人や病弱な人の多さにメルヴィルは胸を突かれている．

次に，物質文明に侵食された彼らの心情面である．タヒチの現地人の間では，船乗りが衣類等の身の回り品を入れておくチェストが家具として珍重されており，チェストの中身についても，たとえそれがぼろ屑のような物であっても，彼らには貴重な物であるさまをメルヴィルは描いている．チェストの中身は，

「衣類については，古いフロック，ぼろ切れのようになったジャケット，ズボンの脚部，長靴下のくるぶしから下の部分だけぐらいしかなかったが，これらの品は無価値どころではなかった．貧しいタヒチの人々の間では，ヨーロッパの物なら何でも高く評価されているからだ．それらの物は“驚異の国，英国”から来た物であり，それだけで充分なのである」．(… of wearing apparel, there was little but old frocks, remnants of jackets, and legs of trowsers, with now and then the foot of a stocking. These, however, were far from being valueless; for, among the poorer Tahitians, every thing European is highly esteemed. They come from “Beretanee, Fenooa Pararee” (Britain, Land of Wonders), and that is enough.—— *Omoo*, Ch. 39, p. 151.)

そして，物質文明に侵された結果，ポリネシア人が白人に対して最初に抱いた純真な友愛の情が，「単に報酬目当ての関りへと変質してきた」(has in most cases degenerated into a mere mercenary relation —— *ibid*., Ch. 39, p. 152.）ことをメルヴィルは嘆いている．

精神的な負の側面としては，メルヴィルは彼らの「怠惰」(indolence）を際立たせている．『タイピー』では，彼らは「陽気で，怠惰で，天真爛漫な人生を送っている」(are leading a merry, idle, innocent life —— *Typee*, Ch. 24, p.236.）と述べていても，彼らの怠惰を否定的に語ることはなかった．しかし『オムー』では，白人の「勤勉な労働姿勢」(industry）と対比させて，現地人の怠惰を悪徳として描いている．

例えば，モーレア島で，「不屈の勤労精神」(a spirit of invincible industry —— *Omoo*, Ch. 53, p.205.）をもつ2人の白人が営む農場の近くに住む現地の漁民たちは「あらゆる種類の怠惰の悪徳」(all manner of lazy wickedness —— *ibid*., Ch. 52, p.203.）に身を任せており，彼らはほとんど1日中，日陰で寝たり，タバコを吸ったり，賭け事をしたりしている．「全体として彼らは陽気で，貧窮し，神をもたない種族だった」(Upon the whole, they were a merry, indigent, godless race.—— *ibid*.）というのがメルヴィルの結論であり，白人たちが重労働をしていても，ただ見ているだけで働かない彼らを「2足動物」(bipeds —— *ibid*., Ch. 59, p.228.）と呼んだり，ラバに喩えたりしている．

最後に道徳的な負の側面であるが，メルヴィルが際立たせているのは，貧窮ゆえとは言え，盗むという行為である．「私」がモーレア島到着後の最初の日曜朝に教会の礼拝に行くと，宣教師は「汝，盗むなかれ」という説教を行ったが，これは，英国人が栽培するイモ畑に夜になると現地人が習慣的に盗みに来ていたからだという設定になっている．また，密造酒をたっぷりもてなしてくれた現地人は，どうやら密かに「私」の連れ——異名 Doctor　Long Ghost[17]——が履いていたぼろぼろのブーツを隠して盗んだ模様だという逸話が書かれている．

しかし，メルヴィルはこれら負の側面と併せて，彼らの人の良さ，善性，自己を犠牲にして他者に与える姿を多くの場面で描いている．タヒチで収監された船乗りたちを自由に行動させてくれる現地人看守の Captain Bob，タヒチでもモーレアでも例外なく精一杯豪華に「私」たちをもてなしてくれる現地人たち．彼らの善良さを最もよく伝えているのが，以下の記述である．

「心のこもった食事を出してくれた彼らは，私たちが美味しいとほめていると，何度も何度もこう言った．お返しは何も期待していないと．さらに，私たちは好きなだけここにいていいと．そして，ここにいる間は彼らの家も何もかもが彼らのものではなくて私たちのものだと．さらに続けて，彼らは私たちの奴隷であり，老妻も度を越すほどまでにも奉仕すると．これがタヒチのもてなしなのだ！客のために自分と家を犠牲にして捧げることなのだ」．(They gave us a hearty meal; and while we were discussing its merits, they assured us, over and over again, that they expected nothing in return for their attentions; more: we were at liberty to stay as long as we pleased; and as long as we *did* stay, their house and every thing they had, was no longer theirs, but ours; still more: they themselves were our slaves —— the old lady, to a degree that was altogether superfluous. This, now, is Tahitian hospitality! Self-immolation upon one's hearth-stone for the benefit of the guest.—— *ibid*., Ch. 67, p.254.)

『オムー』の4年後に出した『モービィ・ディック』の中でメルヴィルは一度だけタヒチに触れている．そこではタヒチが人間のもつ純真な善良さの比喩として使われている．

タヒチに言及する場面をメルヴィルは，海面に広がるニシンの稚魚を食べるセミ鯨の群れの描写で始め，海の恐ろしさと残酷さを語り，最後にこう結んでいる．

「海中であまねく行われている共食いを今一度考えてみよ．海の生き物は皆，互いを食い合い，この世の始まり以来，永劫の戦いを続けている．

こうしたことすべてをよく考えてから，この緑の，やさしい，従順な大地に目を向けてみよ．海と陸の両方をよく考えてみよ．あなた自身の中に何か妙に似ているものを見出さないか？この恐ろしい海洋が緑の陸地を取り巻くように，人の魂の中にはタヒチ島があり，平和と喜びに満ちているが，半ば知った人生の恐怖のすべてに包囲されている．神よ汝を守りたまえ！その島から漕ぎ出

してはいけない，二度と戻ることはできないのだから！」

（…Consider, once more, the universal cannibalism of the sea; all whose creatures prey upon each other, carrying on eternal war since the world began.

Consider all this; and then turn to this green, gentle, and most docile earth; consider them both, the sea and the land; and do you not find a strange analogy to something in yourself? For as this appalling ocean surrounds the verdant land, so in the soul of man there lies one insular Tahiti, full of peace and joy, but encompassed by all the horrors of the half known life. God keep thee! Push not off from that isle, thou canst never return!―― *Moby-Dick*, Ch. 58, p.399.）

メルヴィルにとって，タヒチに代表されるポリネシアは，幼き頃の自分のように純真で善良な，守りたき楽しき園だったと結論付けてよかろう．

5．おわりに――作品の評価

『オムー』が出版された時，メルヴィルと同い年のホイットマン（Walt Whitman, 1819～92）は，『タイピー』の時と同様に，「とてもおもしろくて読みやすい」という書評を発表した[18]．

「『タイピー』の著者メルヴィル氏の新作『オムー』（ハーパーズ出版社）は，綺麗に印刷された2巻本で，とてもおもしろくて読みやすい類の読み物…徹底した娯楽本で，軽薄で投げ捨てたくなるほど軽くはなく，うんざりするほど深くもない」．（“*Omoo*,” the new work (Harpers, pub.) by Mr. Melville, author of “Typee,” affords two well-printed volumes of the most readable sort of reading… thorough entertainment ―― not so light as to be tossed aside for its flippancy, nor so profound as to be tiresome. ―― *The Brooklyn Eagle*, May 5, 1847）[19]

また，D. H. ロレンス（D. H. Lawrence, 1885～1930）は，

「『オムー』は魅惑的な本だ．悪漢，無頼漢，流浪者を題材としている．南太平洋の白人浮浪者のような存在としてのメルヴィル…たぶん『オムー』でのメルヴィルは絶好調で最高に幸せ．今回だけは無鉄砲で，しかも人生をそのまま受け止めている」（*Omoo* is a fascinating book; picaresque, rascally, roving. Melville, as a bit of a beachcomber… Perhaps Melville is at his best, his happiest, in *Omoo*. For once he is really reckless. For once he takes life as it comes.）[20]

と評した．

では，メルヴィル自身は『オムー』をどう評価し，自分の作品群の中でどう位置付けていたのであろうか？第3作の寓意ロマンス『マーディ――そこでの航海』（*Mardi: and a Voyage Thither*, 1849）の執筆中にロンドンの出版者ジョン・マレーに宛てた手紙（1846年7月15日付）の中で彼は前2作の『タイピー』と『オムー』を「2冊の旅行記」（two books of travel）[21]と呼んでいる．

さらに，『ピエール――多義』（*Pierre; or, The Ambiguities*, 1852）の中では「凡庸なもの…ごみ…惨めな書物」と呼んでいる．主人公ピエールは「楽しき愛の詩『熱帯の夏』」（delightful love-sonnet, entitled “The Tropical Summer”―― *Pierre*, Book XVII, p.245.）[22]で華々しくデビューした19歳の若き作家という設定で，メルヴィル自身がモデルだが，デビュー当時の初期の作品を振り返って，次のように彼は書いている．

「貴金属を求めて鉱山を掘る際には，まず無価値な土をたくさん掘り出して捨てなければならない．これと同じく，天才という黄金を求めて自らの魂を掘るときには，多くの退屈なものや凡庸なものがまず最初に日の光にさらされる．自分の中にごみ置場のようなものがあればよいのにと思うが，人間というのは，廃物を収納できる地下室のない住居の居住者のようなもので，戸口の前の通りにごみを出して，市の職員に処理してもらわなければならないのだ．凡庸な自分を書物の中に吐き出してしまうことによってのみ凡庸さは除去できる．一冊の書物の中に閉じ込めてしまったら，その書物を火の中に投げ入れることができて，すっきりするからだ．だが，そうした書物が常に火の中に入れられるわけではない．価値ある書物に対して惨めな書物がはるかに多く存在するのはこういう理由からだ」．（… as in digging for precious metals in the mines, much earthy rubbish has first to be troublesomely handled and thrown out; so, in digging in one’s soul for the fine gold of genius, much dullness and common-place is first brought to light. Happy would it be, if the man possessed in himself some receptacle for his own rubbish of this sort: but he is like the occupant of a dwelling, whose refuse can not be clapped into his own cellar, but must be deposited in the street before his own door, for the public functionaries to take care of. No common-place is ever effectually got rid of, except by essentially emptying one’s self of it into a book; for once trapped in a book, then the book can be put into the fire, and all will be well. But they are not always put into the fire; and this accounts for the vast majority of miserable books over those of positive merits.―― *Pierre*, Book XVIII, p.258.）

作者にとっては『タイピー』や『オムー』は習作で，後の『マーディ』，『モービィ・ディック』，『ピエール』などの寓意的・象徴的作品の下書きであったとも言えよう．

確かに初期の作品には，後の作品に現れる寓意的・象徴的人物の素材と思われる人物たちが出てくる．『オムー』では，例えば，ポリネシアの島々で放浪したり住みついたりしている「下層外国人たち」（a low rabble of foreigners —— *Omoo*, Ch. 65, p.247.）に関する記述中に，後の『モービィ・ディック』に登場するピップやエイハブの外見上のモデルになったと思われる「王室専属ドラマー兼タンバリン打ちをやっている陽気な小柄の黒人」（a jolly little negro… the royal drummer and pounder of the tambourine —— *ibid*.）や「鯨のせいで片脚を失い，木の義脚をしているポルトガル人」（a wooden-legged Portuguese, who lost his leg by a whale —— *ibid*.）のヴァイオリン弾きが出てくる．

しかし，だからこそ読む側にとっては，『タイピー』や『オムー』はメルヴィルのその後の寓意的・象徴的作品群をより深くより的確に理解するために必読の作品である．しかも，そこにはメルヴィルの思想や人間観，世界観が直截な言葉で語られており，19世紀の国際人，地球人としての，そして「真実の語り手」としての元捕鯨船乗組員メルヴィルの本来の姿を見てとることができる作品である．

註

1）Jean-Louis Saquet, *The Tahiti Handbook* (Editions Avant et Apres, 1992), p.90.［　］内の語句は筆者が補ったもの．以下同じ．
2）Jay Leyda ed., *The Melville Log* (New York: Gordian Press, 1969), p.113.
3）*ibid*., p.130.
4）『タイピー』のテキストは Herman Melville, *Typee; or, a Peep at Polynesian Life* (Penguin Books, 1972) を使用し，引用には章と頁数を付した．
5）『オムー』のテキストは Herman Melville, *Omoo: A Narrative of Adventures in the South Seas* (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1968) を使用し，引用には章と頁数を付した．
6）Merrell R. Davis and William H. Gilman eds., *The Letters of Herman Melville* (New Haven: Yale University Press, 1960), p.41.
7）*ibid*., p.53.
8）『オムー』の序文でメルヴィルは，自らが記憶している音声に基づいて現地語を表記したと述べており，「イメーオ，別名モレーア」（Imeeo, or Moreea —— *Omoo*, Ch. 25, p.95.）と表記しているが，本稿では現在一般に使われている呼称と表記「モーレア」（Moorea）を使用する．
9）『モービィ・ディック』のテキストは Herman Melville, *Moby-Dick; or, The Whale* (New York: The Modern Library, 1944) を使用し，引用には章と頁数を付した．
10）*The Melville Log*, p.211.
11）*ibid*., p.216.
12）*ibid*., p.225.
13）*ibid*., p.228.
14）*ibid*., p.245.
15）日本人としては，鎖国中の幕末日本から漂流し米捕鯨船に救助されたジョン・万次郎がメルヴィルと同時期に捕鯨船に乗っていた．メルヴィルは1842年11月９日にモーレアを去ったが，その３週間後の同年同月29日に，当時15歳の万次郎を乗せた米捕鯨船ジョン・ハウランド号がモーレアに入港し，３週間停泊したとのことである．（中濱博『中濱万次郎 ——「アメリカ」を初めて伝えた日本人』pp.32-33.）
16）*The Letters of Herman Melville*, p. 48.
17）この人物は，身長６フィート以上で痩せこけてひょろっとした体型の，素性不明の博識な船医という設定で，捕鯨船ジュリア号内で出会って以降，まるで影のように「私」と行動を共にする．彼の異名「長い幽霊先生」（Doctor Long Ghost）は，長く伸びた自分の影を連想させ，「私」メルヴィルの，もう一人の自分（alter ego）としての側面をもっているのではないかと推察される．しかし本稿では，この点に言及するのみに留めて，深い追求は別の機会に譲る．
18）ホイットマンは『タイピー』を「変わっていて，上品で，とてもおもしろくて読みやすい本…夏の日に手に持って，じっくりと夢見心地で読む本として，これ以上のものはない」（A strange, graceful, most readable book … As a book to hold in one's hand and pore dreamily over of a summer day, it is unsurpassed.—— *The Brooklyn Eagle*, April 15, 1846）と評した．（*The Melville Log*, p.211.）
19）*The Melville Log*, p. 243.
20）D. H. Lawrence, *Studies in Classic American Literature* (Penguin Books, 1971), pp.148-9.
21）*The Letters of Herman Melville*, p.71.
22）『ピエール』のテキストは Herman Melville, *Pierre; or, The Ambiguities* (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1971) を使用し，引用には編と頁数を付した．

参考文献

Anderson, C. R. *Melville in the South Seas*. New York: Dover Publications, 1966.
Arvin, Newton. *Herman Melville*. New York: The Viking Press, 1950.
Auden, W. H. *The Enchafèd Flood, or The Romantic Iconography of the Sea*. New York: Vintage Books, 1950.
Chase, Richard. *The American Novel and Its Tradition*. New York: Doubleday Anchor Books, 1957.
Davis, Merrell R. and Gilman, William H., eds. *The Letters of Herman Melville*. New Haven: Yale University Press,

1960.
Dryden, Edgar A. *Melville's Thematics of Form: The Great Art of Telling the Truth*. Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1968.
Lawrence, D. H. *Studies in Classic American Literature*, Penguin Books, 1971.
Leyda, Jay, ed. *The Melville Log*. New York: Gordian Press, 1969.
Matthiessen, F. O. *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. New York: Oxford University Press, 1941.
中濱博『中濱万次郎 ――「アメリカ」を初めて伝えた日本人』東京: 冨山房インターナショナル，2005.
Rollyson, C. and L. Paddock. *Herman Melville A to Z: The Essential Reference to His Life and Work*. New York: Checkmark Books, 2001.
酒本雅之『砂漠の海 ―― メルヴィルを読む』東京: 研究社，1985.
Scribner, David, ed. *Aspects of Melville*. Pittsfield, Mass.: Berkshire County Historical Society at Arrowhead, 2001.
曾我部学『ハーマン・メルヴィル研究』東京：北星堂書店，1972.
Thompson, Lawrance. *Melville's Quarrel with God*. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1952.
Wadlington, Warwick. *The Confidence Game in American Literature*. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1975.

要　旨

メルヴィルの第２作『オムー』―― 現地語で放浪者の意 ―― は，土地も民もすでに半ば文明化された19世紀中葉近くのタヒチとモーレアを描いている．彼はこれらの島々を放浪した自らの経験に基づいてこの作品を書いたが，その目的は「真実の語り手」として，文明と布教がポリネシアの人々に及ぼした影響を世に伝えることであった．

彼は半文明化された現地人の道徳・宗教・社会状況を描き，彼らの生活に白人キリスト教文明がもたらした幾多のマイナスとわずかなプラスについて語っている．布教活動と文明の影響は，ほとんど現地人のためになっていない，もっと正確に言えば，彼らの文化を消し去って，種族としての存在を絶滅に追いやっているとメルヴィルは言う．

処女作『タイピー』と合わせてこの作品の中に私たちは，元捕鯨船員メルヴィルが国際人，地球人の視点から，自らがその中で育った文明と宗教について言わねばならなかったことをはっきりと聞くことができる．